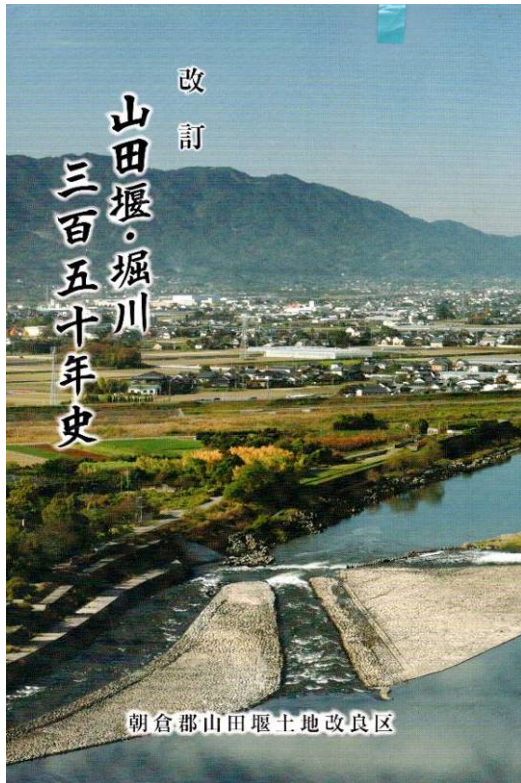


## 河川書の探求(15)

### 山田堰・堀川とアフガニスタンと中村哲医師

古賀邦雄・古賀河川図書館 (JRRN 会員)



#### 1. 山田堰と堀川

福岡県朝倉市山田に位置する山田堰、その堰から取水する堀川は、1790(寛政 2)年下大庭村(現・朝倉市)の庄屋古賀百工によって改築された。現在も農業用水が送られ、一部の水は、堀川に設置された、三連水車・二連水車から揚水する。

朝倉郡山田堰土地改良区編発行『改訂 山田堰・堀川 三百五十年史』(平成 23 年)に、堰の特徴について、次のように記している。

「石積の斜め堰で、洪水の洗掘を回避し、取水の安定を図るため、取水口の間口を広くとり、河道全体を斜めに堰上げて、水位変動を抑え、土砂の流入を防いでいる。さらに対岸に遊水地を広くとり、自然の地形を巧みに組み合わせた構造となっている。」

山田堰に佇むと、その河川空間が何とも言えない不思議な世界に満たされてくる。この水利システムは古賀百工の三十年にわたる筑後川の流れの観察によると言われている。

#### 2. 井戸を掘る

戦乱で荒廃したアフガニスタンに灌漑用水造りを目指したベシャワール会の中村哲医師は、この山田堰に何度も訪れ、その

水利システムを学び取った。芥川賞作家火野葦平の甥っ子にあたる中村医師は、医療活動継続しながら、何度も大旱魃に遭遇、診療所で水の大切さを痛感、「とにかく生きておれ、病気はあとで治す」の心意気で、先ず、アフガニスタンの人七百人を指揮して、1,000 基の井戸を掘った。中村哲著『医者 井戸を掘る－アフガン旱魃との闘い』(石風社・2001 年)がある。

さらに、飢えと渴きは薬では治せない。清潔な飲料水と十分な農業生産があれば、病の多くは救えるとの信念をもって、灌漑用水造りに挑む。

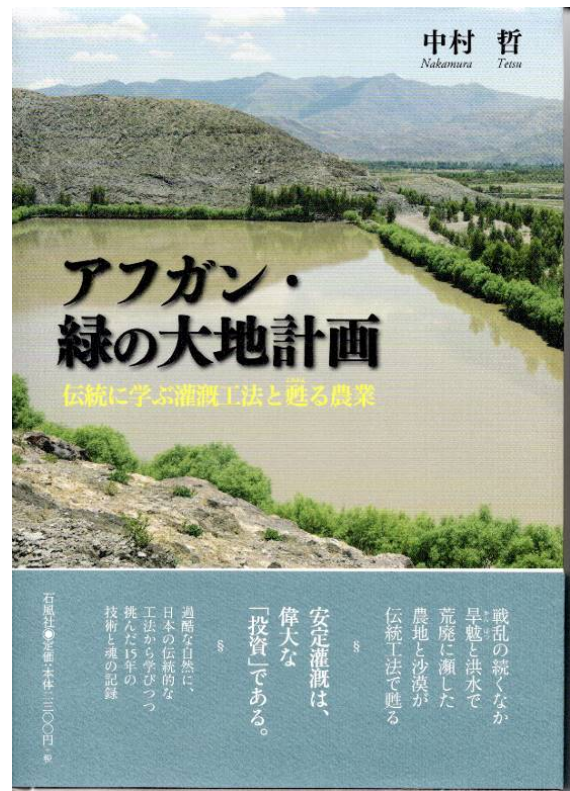
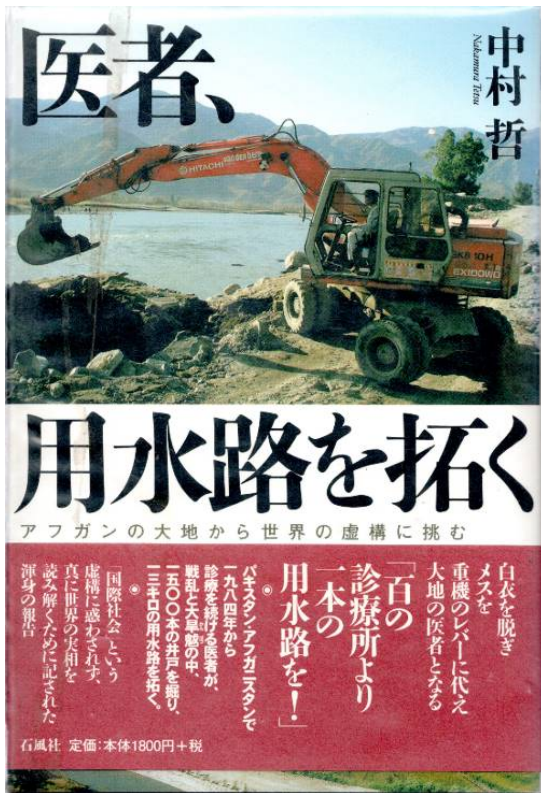


#### 3. 緑の大地計画

アフガニスタンのマリワ用水路取水堰は、山田堰と同じように斜め堰を設置し、取水量は堰板で調節、その下流に沈砂池を設け、用水路の護岸は蛇籠施工(竹や鉄の網に石を積めて川に沈め基礎にする)である。用水路からの水がさらなる灌漑農地を広げている。砂漠地帯が緑に変化した。農産物の小麦などの生産高が向上した。アフガニスタンの人は、最初は誰も完成するとは思っていなかったと言う。人々は水が水路に流れ出したとき、歓喜に包まれた。



中村哲著『医者、用水路を拓くアフガンの大地から世界の虚構に挑む』(石風社・2007年)、同著『天、共に在り—アフガニスタン三十年の闘い』(NHK出版・2013年)、同著『アフガン・緑の大地計画』(石風社・2017年)が刊行されている、



2015 (平成 27)年 3月 26日～28日アフガニスタンより、ドウラニ農業復興開発大臣が、中村医師と共に山田堰を訪問した。山田堰土地改良区事務所には、古賀百工への感謝をこめて、中村医師の色紙「濁流に沃野夢見る河童かな」が飾られている。古賀百工が築いた山田堰・堀川は二百年以上の時空を超えて、アフガニスタンの民を救っている。

中村医師の夢はまだ終わらない。灌漑用水施設の益々の拡大が進捗している。荒れ野が緑の大地に広がっている。